

## 舞踊学の射程

三浦雅士

舞踊は諸芸術の始原であり、美術、音楽、演劇そのほか、さまざまな表現活動を行う場合、つねに参照すべき根源的な表現である、と私は考えている。したがって舞踊学もまた、美学、美術史、音楽、音楽史、演劇、演劇史などがつねに参照しなければならない学であると確信している。哲学、社会学、人類学にしても同じだ。

芸術の体系、学問の体系なるものがあるとしても考えられるとすれば、舞踊および舞踊学こそ諸学の根幹をなす――たとえば礼楽と書道――ということは人類史に一貫している事実である。舞踊が人間の仕組――たとえば幼児の模倣反復と意識の関係――に直結している以上、これはほとんど自明のことである。

しかも、二十一世紀も早や五分の一を過ぎた現在、たとえばユーチューブひとつを取ってさえ、事態が舞踊学に有利に展開していることが分かる。記録映像への容易なアクセスは舞踊学の巨大さを強烈に印象づけるのである。

とはいえ、この考えが一般に共有されているかといえ、そうではない。この二、三百年続いてきた舞踊への蔑視がいまも尾を引いているからである。

半世紀を遡る昔の話になるが、一九七〇年代、私は詩誌「ユリイカ」、思想誌「現代思想」の創刊、編集に携わっていた。私が当時、舞踊に深い敬意をもっていたことは、舞踊評論家の市川雅に「舞踊のコスモロジー」を「現代思想」に連載するよう依頼したことからも分かるだろう。だが、身体の根源性がそのまま舞踊の根源性であるとまでは考えていなかった。

それが大きく変わって、舞踊こそ諸芸術の女王であることに気づいたのは、一九八〇年代半ばニューヨークに一年半ほど滞在したときのことである。私は打ちのめされるほどの衝撃を受けた。その覚醒をもっとも喜んだのは市川雅であり、帰国早々、「朝日ジャーナル」での対談を企画してくれた。だが、実現したその対談は、緊急のニュースが入るなどして、結局、掲載されずに終わった。私は安原頭に持ち込んで、それを「マリ・クレール」に発表してもらった。これに触れるのは、そのとき市川雅が「舞踊だからしょうがないんだ、いつもこうなんだよ」と慨嘆したからである。「舞踊、舞踊学は馬鹿にされているんだ」といったその声はいまも忘れられない。一九八六年か七年頃のことだ。

その後、熊川哲也が登場し、羽生結弦が登場して、状況が大きく変わり隔世の感があるが、たとえばコリオグラファーの篠原聖一は、自分がバレエを習い始めた一九七〇年代は、習っているだけでシスター・ボーイと囃されたといっ

ていたほどで、それほど時代が変わったのである。もつとも、たとえばアメリカがいまも昔と同じ状況にあることは、イギリスのジョージ王子がバレエを習っていると報道されたときに起こった一件からも明らかである。

舞踊の特徴は性の問題にあからさまにかかわることだ。舞踊学も同じ。先に哲学、社会学、人類学について触れたが、学としての成立の順に性を主題にする姿勢が強まっていることに注意すべきである。逆にいえば、哲学においては性など無きが如し、だったのだ。性の隠蔽は哲学から始まったというべきだろう。人類にとって舞踊が根源的であるのは、性が根源的であるのと同じことなのだが、性についてはいまなお学の対象になりきれていない。フェミニズムはその党派性によって逆効果になってきたと私には思われる。

学問は長く男性のものだったので、性といえば女性を思い浮かべるが、間違っている。ラグビー・ワールド・カップで、キック・オフ直前のウォー・ダンスが話題になったが、戦闘舞踊の研究が皆無に近いのはそれが性の問題であることを抑圧しているからである。たとえばグルジア舞踊の軸は戦闘舞踊だ。日本にも幸若舞があるが――独舞と群舞の問題が潜む――管見ではそういう視点からの研究はない。

戦闘舞踊の多くは男性舞踊だが、これを性の問題として扱った文献はほとんどない。性の問題であることはマイケル・ジャクソンの舞踊ひとつに明らかである。戦闘舞踊すなわち勇気の鼓舞。攻撃と性の問題は、密接に絡むにもかかわらず避けられてきたのだ。ここには近代そのものを根底から問い直すほどの問題が潜んでいて、それこそ舞踊学が真正面から取り組まなければならないのだが、おそらく、舞踊は女子供の稽古事といった偏見に舞踊学もまたいまなお捉われているのだ。

以上は一例にすぎない。相変らずバレエ・リュスからコンテンポラリー・ダンスまで二十世紀舞踊史を研究するのも、遡って十九世紀ロマンティック・バレエを研究するのもいいだろう。日本舞踊も大いに結構である。参考文献もほどよく揃っている。

だが、いま切迫した問題として眼前に横たわっているのは、インドネシア、タイ、ビルマ、カンボジアから華南を通して台湾、沖縄、日本へと延びる舞踊の系譜の探究であって、各国の宮廷舞踊であってさえも、二十一世紀の現在、必ずしも十全に伝統が保護されているわけではないと思えるからである。日本の民俗舞踊も同じ。かりに探究があっても論じられるべき文脈が明示されないのである。だがこの問題にある程度の見通しをつけることこそ、私は重要だと思っている。

その後にはバレエすなわち遊牧民の舞踊の系譜、すなわちたとえばチベット舞踊、ウィグル舞踊の研究に向かうのが良いのではないか。

この探究が重要なのは、現在進行している世界史、地球史の画期的大変動と密接に絡むからである。いずれ歴史学の側から接近してくるだろうが、その前に舞踊学の側から踏み出すべきだと私は思っている。同様のことは、哲学、社会学、人類学についてもいえるのであって、舞踊学のほうから、舞踊の哲学、舞踊の社会学、舞踊の人類学を積極的に推し進めるべきなのだ。

舞踊学が守備すべき範囲の広さと深さにはほとんど絶望感を抱くほどだが、少なくとも若い世代にとっては、逆にこれほどやりがいのある学問はないだろう。

舞踊学の射程は気が遠くなるほど広く深い。

三浦雅士（みうら まさし 評論家）

1946年生まれ。1970年代、『ユリイカ』『現代思想』の創刊、編集を手がけ、80年代、執筆に転じ、文学、芸術を中心に論じる。80年代なかば、コロンビア大学客員研究員としてニューヨークに滞在、舞踊に強い関心を持つ。90年代、月刊『ダンスマガジン』の創刊、編集を手がけ、以後、舞踊をも広く論じ、現在は同誌顧問。主な著書に『私という現象』、『メランコリーの水脈』（サントリー学芸賞）、『身体の零度』（読売文学賞）、『青春の終焉』（伊藤整賞）など。2012年、『漱石』、『考える身体』、『出生の秘密』などの業績で芸術院賞恩賜賞を受賞。他に、『バレエ入門』『バレエ名作ガイド』『ブラヴォー』（ともに新書館）など、舞踊関係の著書も多い。最新刊に2018年の『孤独の発明』（講談社）がある。